

2017
おもろ
チャレンジ

アイルランド伝統楽器、バウロンの修行

農学部 1 年

酒向 快

アイルランド

2017 年 8 月 8 日 -

2017 年 9 月 1 日



渡航概要と内容

アイルランドへ渡りバウロンの修行をするとともに、伝統音楽や文化を学ぶのが、今回の渡航の目的だった。前半はクレア県エニスとフィークルで開催された伝統音楽フェスティバルに参加し、エニスではサマースクールでバウロン奏者から直接の指導を受けた。フラワーと呼ばれる国内最大の伝統音楽祭には国内外から音楽家や観光客が集まり、日中はコンサートが開かれ夜にはパブでセッションやギグ（セッションライブ）が行われた。私もそれらに加わりバウロンやティンホイッスルを演奏した。フィークルは小さな田舎だが、祭りの週だけは毎日 100 人以上の人々が集い、村に 4 つあるパブは超満員の盛り上がりを見せた。

後半は音楽が盛んな地域を巡り、それぞれの土地の音楽のあり方や特徴を見てきた。回った土地を挙げると、ドゥーリン、ミルトアウンマルベイ、アラン諸島、キンバラ、ゴールウェイ、アスロン、ダブリンで、アイルランド西岸を中心に移動した。各地のパブで夜な夜な開催されるセッションに参加し、地元の音楽家たちと交流した。





文化の違いで苦労したことはほとんどなかったが、日に三度の食事が美味しくなかったのはかなりきつかった。イギリスやアイルランドの食文化が発達していないことは有名な話で覚悟はしていたが、それでも堪え難いものがあった。食材が売られていない訳ではないので自炊をすればいいのだが、ほぼ毎日宿泊施設を変えていたためその機会も少なく、料理が美味しそうな店を探すのは一苦労だった。また文化とは言えないかもしれないが物価の違いにかなり苦しめられた。アイルランドでは食費がとにかく高く、レストランに入って昼食をとろうと思うと 14,15 ユーロは必要だし、夕飯となると 20 ユーロ近く払わなければいけないことも普通だった。渡航費に奨学金の大半を当ててしまったため残りの資金が限られており、やりくりが大変だった。とはいえ酒類は比較的安価で、特にアイルランドの地ビール、ギネスは 1 パイント 5 ユーロと日本よりずっと安かったので、パブセッションの時には助かった。



トラブルは往復の飛行機でおきた。行きのフライトは渡航費をなるべく安く抑えようと、乗り換え 2 回、総移動時間 28 時間と体力的にきついチケットをとった。そのせいか 2 回目の乗り換え地アムステルダムでぼんやりしていてアナウンスを聞き逃し、ダブリンへ移動するフライトを逃してしまった。乗り遅れたことが分かった時にはとりあえず航空券を買った仲介業者や飛行機会社に電話したが一切繋がらず、ほとんどパニック状態で空港のオフィスに飛び込んだ。本来なら新しいチケットを 800 ユーロで買わないといけないところだったらしいが、親切なオフィスレディーのはからいで翌朝のダブリン行きの便を無料で取り直してもらった。おかげで旅程が少しずれダブリン一泊目の宿代が飛んだだけで済んだのは本当にラッキーだった。その晩は空港で寝る訳にもいかないのでアムステルダム市街地で一泊し、次の日無事にダブリン空港に到着した。

もう一つのハプニングもまた格安チケットをかったために起きた。行きの失敗を教訓にフライトは逃さないように気をつけていたため、帰りは無事成田空港へ到着したのだが、今度は預けていたバックパックが届かなかった。荷物紛失はよく聞く話だが、私の場合には格安チケットを購

入ったせいで一つ目のフライトと二つ目のフライトの航空会社が違い荷物のやりとりがされず、最初の乗り換え地のアムステルダムに荷物が取り残されてしまったのだった。帰国後数日の間は荷物が見つからず私も半ば諦めていたが、無事一週間後に荷物は戻り、中身も無事だった。

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

アイルランド音楽は確かに土地に根付き、人々の生活にとけ込んでいた。現代の日本では「伝統の継承」というと堅苦しく、失われていくものを努力して残すニュアンスがあるが、アイルランドでは違う。彼らは遺産としての「伝統音楽」を保全しているのではなく、伝統かどうか関係なく好きな曲を演奏し、歌をうたっているのだ。十代後半の青年たちのセッションで、伝統を継承している自覚はあるかと彼らに尋ねたが、特に意識していないと誰もが答えた。ある少女にとっては家族が演奏するから当たり前ことだったし、ある青年はロックやジャズと同じようにかっこいいからやるだけだと言っていた。伝統音楽の次の担い手でありながら、伝統や歴史の重みを重圧とは感じていないのだ。また現地に滞在している間、パブに居合わせた人たちが突然大合唱する場面に度々出くわしたが、歌われる曲は何百年も歌い継がれてきた恋の歌のこともあれば、70年代のフォークソングのこともあった。歌う曲がいつ作られたかは問題ではなく、その日その場所で自分たちが歌いたい曲を歌うことがすべてであり、それが自然と伝統の継承になっているのだ。また面白いのは、楽器を演奏し歌をうたうのは必ずしも職業としての音楽家だけではないところだ。むしろ音楽を生業にしているほうが珍しく、彼らのいう” musician”とは音楽を奏でる人のことで、職業は学校の先生であったり、トラック運転手であったりなんでもいい。伝統音楽の担い手は市井の人々であって、だからこそ音楽が生活の一部として世代から世代へと受け継がれていくのだろう。

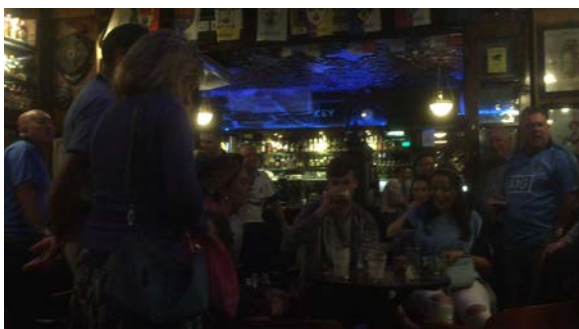
話は変わるが、Musician が職業でないためアイルランド音楽の中心はセッションになる。セッションでは初心者から熟達者まで数人から十数人くらいの音楽家がフィドルやフルートなどそれぞれの楽器を持ち、基本 16 小節しかない簡単なフレーズの曲を、ユニゾンで何度もリフレインして合奏する。数曲続けて演奏したらしばらく周りの人と会話をして、また演奏したら会話をして、と続いていく。誰かに向けて演奏するのではなく、純粹に自分たちが楽しむためにある点で、コンサートやライブとは赴きが異なる。



土日や平日の夜に毎週どこかの決まったパブで、一人から数人のホストと呼ばれる主催者が中心となって曲を出し、他の皆はそれに従って演奏する。だからホストの性別、年代、出身地に性格、またパブの立地なんかで、セッションのカラーが大きく異なってくる。例えば20代くらいの若いホストのセッションではアップテンポでカッコいい曲が中心に出され、曲の始めと終わりでは倍速くらいになって豪快にフィニッシュするなんてこともあるが、70代の老人ホストのセッションではノリとリズム感に粘りのある落ち着いた演奏が中心だったりする。またセッションには地域性があることも今回行ってみてよく分かった。例えばキンバラという、船乗りの集まる港町のパブではまさに船乗らしいノリがあった。強いアクセントに派手な装飾音をつけ、大きな音量で激しく自己主張するのだから、初めはその荒っぽい演奏に不快感すら覚えたが、これもまた人と土地と音楽とが密接に結びついている伝統音楽だからこそその味わいなのだろう。

ところでアイリッシュ文化は永遠、循環、死と再生といった考え方がその根底にあると言われるが、セッションにも同様の思想が顕われているように感じられる。なぜなら上述した通りセッションでの演奏は短いフレーズだけで成り立っており、それを少しずつアレンジしながら無限に繰り返すことができるからだ。実際現地のセッションでは、盛り上がりと同じフレーズを10数回と繰り返すこともあった。さらに演奏だけでなくセッションの行われ方も、会話と演奏とが交互に繰り返されるある種の循環であり、もっと言えば毎週同じパブで同じ仲間と同じ酒を飲みながら同じ曲を演奏する彼らの生活のあり方も永遠の循環であるように思える。アイルランド音楽は今や世界中で演奏され、様々な音楽と融合し一大音楽ジャンルとなっているが、自分の足で本国へ赴き現地の人々に演奏されているところを聞くと、やはり伝統音楽は決してそれ自体で独立するものではなく、文化の一部として人々の生き様を反映するものであることがわかった。農民の音楽として発展したアイリッシュはいまでも、地域のコミュニティーに生きる人々を結び、日々の労働を癒し、そして淡々と繰り返す毎日に喜びを与えているのだろう。

さて以上よりアイルランド音楽の土着的な面を述べた訳だが、一方で世界各国でセッションが行われ、「アイリッシュ」でないアイルランド音楽が存在することも確かである。異文化の人間が演奏するこうした音楽はしばしば骨抜き音楽として批判され、日本でもアイルランド人の演奏の伝統に従うべきだという保守と、自由な解釈で演奏しても構わないという革新と対立意見が存在する。渡航前の私はアイルランドへ渡ったこともなく演奏経験も浅かったため、楽しければいいでしょと後者に傾倒していたが、渡航中に前者の考えに強く共感することもあり、今では両者共に重要であると感じている。



到着してから毎晩のように参加していたパブセッションで、輪の中にはいるけれど自分の音を聞いてもらえないことが何度もあり、強い疎外感を感じた。初めは理由が分からず戸惑い、演奏技術が足りないからだろうか、コンディションの問題だろうか、それとも演奏家同士の相性の問題なのかと悩んだが、一週間程たち上述したアイルランド音楽の土着性を感じ初めてきた頃に、理由がはっきりと分かった。同じ土地に生まれ育った彼らのセッションには微妙なニュアンスや文脈があり、そういった音楽の繊細な部分を文化的他者である私には感じ取ることができず、精神的な距離ができていたのだ。例えばパブである女性がリクエストした曲を合奏した場面があったのだが、後で聞くとその曲は女性の亡くなった兄の十八番で、その兄が父から受け継いだマンドリンを音楽家のひとりが今は演奏しているため、その日はリクエストでその音楽家が演奏したのだという。こうした何代にも渡る音楽を介する人々の繋がりこそアイルランド音楽の神髄であり、セッションを豊かで親密なものにしているのだが、なんとなく共有されている哀愁など到底気づくはずもなく、結局一体感を出すのが難しくなってしまうていたのだ。こういう訳で保守派の人々が、伝統を知らなければアイルランド音楽を演奏していることにはならないと主張するのも納得がいった。特に滞在中は周りにアイルランド人ばかりだったため、絶対に必要だと腑に落ちていた。

しかし改めて考えてみるとこの考え方には欠陥があった。実はアイルランド人と音楽を通して交流することと、アイルランド音楽を奏でることは分けて考えなければいけないのだが、それを混同してしまっているのだ。アイルランド人とセッションし、交流するには絶対条件とまではいえないまでも異文化理解は大切だ。何を思い何を感じながら演奏しているのか知ることには大事なことからだ。もちろん彼らが積み上げてきた伝統へのリスペクトも忘れてはいけない。だがそれがアイルランド音楽を奏でる上で彼らの伝統を踏襲すべき理由には決してならない。「アイリッシュ」なアイルランド音楽は、確かに独特の文化であり素晴らしい音楽のあり方だが、だからといって外国人が演奏するアイルランド音楽より優れたものであるという根拠はなく、むしろ外国人がアイルランド音楽を演奏するのに「アイリッシュ」な演奏するよりも、その国の人らしい演奏をする方が国内の演奏家とはより親密な交流ができるだろうし、観客も引きつけられるだろう。文化としてのアイルランド音楽という側面は始めは失われているかもしれないが、しかし異国の地でこれから発展していくアイルランド音楽も、演奏家ひとりひとりの経験からくる解釈や、その土地の音楽といったものに影響を受けながら独自の発展をとげ、ひとつの音楽のあり方として許容されていけば、また新しい文化になるだろうと私は思う。

それにつきつめれば保守も革新も目指しているのは演奏家同士の心の交流と、人々を楽しませるような演奏である。日本人はアイルランドの伝統に従いアイルランド人と交流する事もできるし、アイルランド音楽を日本流に解釈し普遍的な音楽を作り上げる事で、文化の壁を超える交流を目指すこともできる。伝統的な演奏で観客を引き込むことも、全く新しい音楽で楽しませる事もできる。音楽を楽しみ楽しませられるか、それだけが大切なのであって、アイルランドでも日本でも世界でもどこでも



同じなのだ。

荒いまとめにはなるが、今回の渡航では文化とはなにか、異文化交流とはなにか、音楽とはなにか、そういったことを自分の問題として考える良い機会となった。また日本人の自分が日本の伝統音楽ではなく、アイルランドの伝統音楽を演奏していることに多少の引け目を感じていたが、今回の渡航を通して思い考えたことは、これからも演奏活動を続けていく自信に繋がった。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

まず修行の経験を演奏技術の向上へつなげていきたい。本場のバウロンプレイヤーから受けた指導やセッションで吸収した技やノリは既に演奏に活かしているが、これからも存分に取り入れていきたい。技術だけでなく、今回得られた文化、音楽への理解や演奏家としての自信も、音楽の道を極めていく上での足がかりとしていければと思う。

また私の本学での学びである農学にも活かしていきたい。アイルランド音楽は農民の音楽だから音楽について考える事は背後にある農耕民の精神性に触れることであり、例えば現代において、人間の根本的な活動である農業と人々との距離が広がるなかで、人と農業と文化との健全な関係について考えていく上でも、今回の旅は貴重な経験になったと思う。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*宿泊費

*食費

*サマースクール・レッスン代

*その他雑費 など